

滋賀県立琵琶湖博物館  
第三期中長期計画

令和5年度（2023年度）内部評価

令和6年（2024年）7月

## 内部評価 総評 (館長による評価)

第三次中長期基本計画の3年目が終了した。2年目の内部評価・外部評価を受けて、引き続き計画の見直しを行いながら、事業目標の実現に向けて活動を行った。

「事業目標1」については、調査研究報告書の公開と利用実績が着実に上がり、博物館ウェブサイトの研究成果紹介ページ作成など、重点事業1-2は順調に進んでいる。1-1についても、総合研究の知見が蓄積されその一部は2024年度の企画展示として公開することができた。企業との連携やデジタルミュージアム推進事業（以下、DX事業）の活用など、1-3で掲げた研究体制の整備による研究成果もあがっている。課題は研究備品の確保であり、予算削減の中、研究の推進と発信が継続できるよう創意工夫が必要となっている。

「事業目標2」については、DX事業により、特に重点事業2-3において大幅な進展が見られた。館内Wi-Fiの強化のほか、電子図鑑や3Dコンテンツ、鳥類時空間出現情報の整備を進めることができた。画像撮影や電子化なども進め、2-2で掲げる資料の整理推進と公開による利用促進も、着実に進めることができた。しかし、2-1に掲げた資料の管理体制の強化については、一部の設備はを除き、まだ多くの課題が残されている。

「事業目標3」については、新しい「びわ博フェス」の企画運営により、重点事業3-2の出会いの場の創出を進めることができた。3-1による館外の個人や団体等が主体となった事業の充実と合わせ、今後は多様な主体が相互に交流し、連携を促進する仕組みを充実させていく必要がある。学校との連携については、教員研修で実施した内容の実践を意識する教員も多く、今後とも追跡調査等を行って研修の効果を分析していく必要がある。

「事業目標4」については、常設展示の小規模更新や企画展示・ギャラリー展示の開催による最新情報の提供により、重点事業4-3を進めることができた。また、DX事業の推進により展示室内のインターネット環境が改善され、使えるコンテンツの充実と利用が可能となった。その結果、4-2の「観る+使う」展示への成長を促進させることができた。「ポケット学芸員」には英語音声解説も追加され、4-1の誰もが楽しみ学べる博物館展示へと一歩前進することができた。なお、水槽破損事故を受けた水槽修繕については、破損した水槽およびそれと同形状の水槽を除き、令和6年6月までに全てのアクリル交換を完了することができた。

「事業目標5」については、博物館の日本語ウェブサイトへの琵琶湖の概要紹介ページや研究成果公表ページの作成、SNSによる情報発信や英語による発信の強化により、重点事業5-1を進めた。その結果、SNSの登録者数を増加させることができた。また、アンケート調査や学校訪問時の意見や要望等についての集計を進めることはできたが、具体的な博物館活動への活用には至らなかった。5-2に掲げる双方向の広報や事業への反映は、今後の課題である。5-3については、来館しやすい環境の洗い出しのほか、来館が難しい方の利用も含め、今後とも検討を続ける必要がある。

「事業目標6」については、懸案となっていた修理の一部を実施することができ、施設の老朽化箇所の調査も行うことができた。今後はそれに基づく修繕計画を策定することで、重点事業6-1を進める必要がある。災害への備えについては、マニュアル更新等に課題が残されている。支援を受ける仕組みについては、水族展示室の再生に向けたクラウドファンディングや新たな支援寄附制度の整備により、多くの方々から支援を受けることができた。今後とも支援制度の整理・整備を行いながら、6-2の安定した活動基盤を確保する仕組み作りを進める必要がある。

## ○事業目標1 琵琶湖の魅力を深く掘り下げ、世界に紹介

- ・ **実施目標**：琵琶湖やその周りの暮らしの価値を地域の人々や国内外の研究者とともに発見し、その魅力を国内外に広く発信します。
- ・ **評価指標**：地域の人々や研究者など多くの人による琵琶湖や湖と人間の研究が発信される

### ・ 内部評価

重点事業1-2に掲げた情報発信体制の強化は進んでおり、事業目標を達成するための基盤整備は着実に進展を見せている。発信すべき内容については重点事業1-1で進捗管理を行っている総合研究をはじめ、共同研究・専門研究や科研費などによる研究で琵琶湖地域の魅力を発見する活動は継続しており、総合研究の成果の企画展示への反映など、一定の進捗が見られる。一方で、次期総合研究については、1-1に掲げた重点事業の目標や事業目標1の実施目標・評価指標を意識した計画を打ち出す必要があるが、その検討には時間がかかっている。また、基盤となる研究体制の整備は部分的に進んでいるものの、予算の制約等で停滞気味であり、一層の創意工夫が必要となっている。

### ・ 各重点事業の目標と実施状況

#### 1-1. 世界有数の古代湖としての琵琶湖の価値を高める研究の推進

現在実施している総合研究では各分野の知見が蓄積され、2024～2026年度の企画展示にその成果を反映される予定である。2024年度は水草（藻採り）を報告する。また2025年度末の終結に向けて全体構成の検討を進めている。次期総合研究については検討中で、25年度に総研開始前の予備的な研究は始まるように準備中。評価としてはおおむね順調に進んでいる。

#### 1-2. 研究成果を国内外に発信し、琵琶湖の魅力を人々に伝える

ウェブでの調査研究報告書の公開(J-stage)は新たに4件が追加され、年間のダウンロード数も13000件を超えるなど利用実績が上がっている。また、琵琶湖の概要、研究論文を紹介・解説するページを設け、掲載を開始した。進行状況としては順調である。

#### 1-3. 研究の質を高める環境の整備ならびに研究の活性化

伊藤忠商事との連携により稀少種保護の研究体制が整備され、研究が進んでいる。DX事業を生かした研究も土器の3D画像を活用した研究成果が公表されるなど、進展がみられる。一方、大型備品（軟X線検査装置）の調達が水槽破損の影響を受けて1年間繰り延べとなったほか、その他の備品は予算確保が難しく進んでいない。後者については機会を逃さないように調達リストの更新等を随時行っている。評価としては、環境の整備と研究の活性化が部分的ではあるが進んでいるものの、全体を活性化するための手順については足踏み状態が続いている。

## ○事業目標2 資料を未来に遺し、どこからでも使えるように整備

- ・ **実施目標**：貴重な標本・資料を将来にわたって人々が利用できるよう、適切な整理・保管を進めるとともに、ICT を活用した利用方法の開発により、琵琶湖博物館の知的資源を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるように整備します。
- ・ **評価指標**：整った環境で保管されている湖と人間の資料・情報がどこからでも使えている

### ・ 内部評価

標本・資料の適切な管理体制（施設整備含む）については、施設老朽化と予算削減にもかかわらず、担当者の工夫や外部予算の活用によって確実に進んでいる。ただし老朽化による問題を全てカバーするには至っていない。標本・資料の整理は、予算および収蔵スペースの不足により、やや滞りがちである。「だれでも・どこでも・いつでも」使える標本情報を中心とした知的資源の整理について、資料情報の公開は実施目標に向かって概ね順調に進んでいる。電子図鑑の新規整備や3Dコンテンツ、地理情報整備など新機軸の情報整備・公開については「デジタルミュージアム推進事業」の予算を確保したことにより大きな進展が見られたが、確保した大型予算に見合う人員が確保できなかったこともあり、年度当初の計画ほどには進まなかった。また博物館が接続するセキュリティ・クラウドの制約およびコンピュータのマシンパワーの制約から、電子図鑑に付随する生物同定補助システムの開発など先進的な試みは、必ずしも進まなかった。

### ・ 各重点事業の目標と実施状況

#### 2-1. 標本・資料の管理体制の強化

照明設備現況等調査が行われ、次年度に収蔵庫空間の照明の大部分をLED化できる目処が立った。トラックヤードの「下げ始めると止まらない」危険なシャッターを修繕するための予算を確保した。空調の大規模調査は予算の関係で次年度送りになった。2025年3月のエキヒュームS（燻蒸用ガス）販売終了を受けて代替手法の検討を始めた。

#### 2-2. 標本・資料の整理の推進と公開による利用促進

3万点弱の資料を新規登録した（年報4-1-(1)）。画像データベースに新たに「動物」の公開項目を設定し、魚類および鳥類の写真計338点を公開した。博物館の資料を活用した論文・著書などが計19件公表された。「デジタルミュージアム推進事業」の中で、電子図鑑のための画像の撮影及び収集、著作権フリーの図書・文献情報の電子化などを行った。

#### 2-3. ICT を利用し、だれでも・どこでも・いつでも使える博物館を創出

「デジタルミュージアム推進事業」により館内Wi-Fiの強化を進め、来館者がこれまでより広い範囲でより快適にWi-Fiを活用できるようになった。写場の設備が部分的に更新され、これまでより活用されるようになった。博物館が持つデジタル情報を「だれでも・どこでも・いつでも」使えるようにするために、電子図鑑（既存のものも含め5分野）、3Dコンテンツ（土器および骨）、地理情報システム上での鳥類時空間的出現情報の整備を進めた。さらに、深層学習を用いた生物同定支援システムの構築にも挑戦した。

### ○事業目標3 みんなで学びあう博物館へ

- ・ **実施目標** : 交流事業を知識や経験を交換し合う「学びあいの場」と位置づけ、さまざまな人や組織と連携して充実を図るとともに、参加する人の相互の出会いが新たな活動につながる環境を創ります。
- ・ **評価指標** : 利用者が実施者になった多様な交流事業が実施される学びあいの場で情報交換が行われる

#### ・ 内部評価

幅広いニーズに応える交流事業につきましては、イベント系事業と連携系事業の充実（年報 p18-59）を図ったとともに、特に外部団体等が主体となった参画型事業を実施し、協働（共催事業も含む）の仕組みの改善を行った。また多様な団体や個人が相互に交流し、学びあえる場として開催した新しい「びわ博フェス」の企画運営を行った。特に市民ワークショップや活動実践について意見交換型トーク、交流会を介して学びあいの充実を図ったことは参加者から好評を得た。一方、今後の課題としては参加団体と地域との今後の連携を促進する仕組みが必要である。学校団体との連携については、初任者研修後にアンケートで「琵琶湖博物館で受けた研修内容について実践してみたいと意識しているか」に関して、9割以上の教員が意識していると回答したほか、種々の意見や関心を示してもらった。今後、教員研修受講者への継続した追跡調査や分析を行う必要がある。また、体験学習以外にも館内の利用の充実も工夫したい。

#### ・ 各重点事業の目標と実施状況

##### 3-1. 幅広いニーズに応える交流事業の充実

幅広いニーズに応える交流事業では、種々の専門知識や地域イベントへの支援を必要とする交流事業のニーズが依然と高い。学芸職員のみならず、特に活動実践者（個人や企業など）が主体となる交流事業の実施を通じて連携の機会を幅広く創出した。特に実践者主体の交流事業では、びわ博フェス 2023（2023年11月18日・19日）や淡海こどもエコクラブ活動者交流会（2024年3月17日）、企業連携による保全活動の成果展示（2024年1月30日～2月25日）等を行い、連携交流を深めることができた。

##### 3-2. 出会いの場の創出

フィールドレポーターや「はしかけ」が相互に交流し、来館者と出会う場として「びわ博フェス 2023」を実施した。びわ博フェスでは、「はしかけ」等がワークショップを行うとともに、3分間トークという形で活動概要を発表した。また、新たな試みとして企業や地域団体も含めた交流会（茶話会）を行い、参加者からは高評価を得た。

##### 3-3. 「深く学ぶ力」に基づく琵琶湖学習の支援

今年度は、琵琶湖学習に関わる教員研修では、自然調査ゼミナール、フローティングスクール連携教員研修会、初任者研修（特別支援学校、2回）、小学校教員研修（4回）、滋賀県 CST 教員研修会を実施した。また琵琶湖学習に関わる学校団体への体験学習にかかわる連携事業では、講義（28校）、プランクトン観察（10校）、ヨシ笛づくり（28校）、外来魚解剖（12校）、シジミストラップづくり（9校）を実施した。今後も、さらに体験学習を重視した環境学習を博物館や地域で実施するための工夫や支援の仕組みを考える必要がある。

## ○事業目標4 もっと使いやすい博物館へ

・ **実施目標**：琵琶湖を知る「入口」としての展示を、より使いやすく、常に成長する展示として発展させます。

・ **評価指標**：湖と人間の最新情報が常に得られ現場への興味をもつ人々が増える

### ・ 内部評価

展示室において、最新情報を踏まえた常設展示の更新を随時行い、最新情報を踏まえた企画展示およびギャラリー展示、トピック展示等を実施した。また、職員や地域の人による活動が来館者に見えるようにするため、オープンラボでの活動を推進し、展示室でもその活動紹介を行った。ICTの利用による展示室でのガイド「ポケット学芸員」では、日本語に加えて英語が使えるようになり、来館者の利便性が向上した。令和5年2月に水族展示室の大型水槽が破損し、第三者委員会による調査で複数の水槽で修繕が必要な箇所が見つかったが、それらについては予算を要求して修繕を行い、令和6年度には一部水槽の再開ができることになった。展示室におけるICTを使ったより深いコンテンツへのアクセスについては、展示室内のインターネット利用環境が順次改善され、以前より使いやすくなった。今後はDX事業の成果なども取り入れて具体的なコンテンツを充実させ、展示室での学びを深める工夫を継続する。

### ・ 各重点事業の目標と実施状況

#### 4-1. 誰もが楽しみ学べる博物館展示への成長

令和5年度より唯一の音声ガイドアプリとなった「ポケット学芸員」では、令和4年度に導入された日本語に続けて英語の音声解説を追加し、順調に内容充実が推進されている。今後はさらに中国語も検討中で、より多言語に対応できるよう内容を増やしていく計画である。

#### 4-2. 「観る」展示から「観る＋使う」展示への成長

展示室内でのインターネット利用環境が改善されたので、これまで公開していた電子図鑑や「おうちミュージアム」のコンテンツだけでなく、DX事業の成果物等も含めて、より使えるコンテンツが展示室から利用可能となった。今後は、改善された環境を生かし、具体的に展示室からのアクセスポイントを増設する計画である。

#### 4-3. 社会の変化や研究成果を反映させた展示の成長

全ての常設展示室で、展示内容のアップデートを行い、小規模な展示更新を複数実施できた。元の中長期計画では、C展示室と水族展示室において更新計画の見直しをする予定であったが、予算の関係もあり、令和5年度も前年度に引き続きリニューアル当時の機器類（照明、映像など）の入れ替えや展示手法の見直しを進め、問題点は順次解決されている。また、令和5年2月に発生したビワコオオナマズの水槽が破損により、令和5年度には第三者委員会による水族展示室のすべての水槽について検証が行われ、別途予算も要求しながら順次水槽の修繕が進行している。令和6年度にはいくつかの水槽の再開が行われる計画で、さらにビワコオオナマズの水槽の再構築についても作業が進みつつある。企画展示およびギャラリー展示では、最新の研究成果を親しみやすい形で利用者に提供しているほか、様々な試験研究機関や地域で活動を行う個人や団体とも協働して展示を行うなど、内外の協力を得て展示の内容の充実や成長を推進できている（詳しい内容は年報に記載）。

## ○事業5の目標 より多くの人が利用する博物館へ

- ・ **実施目標**：ICT を活用し「世界」を見据えた広報を展開して、より多くの人の利用を実現します。また、双方向の広報によって常に博物館の社会的評価を情報収集し、博物館の魅力向上に役立てます。
- ・ **評価指標**：館内および館外からも利用がしやすくなり利用が増える

### ・ 内部評価

実施目標としてあげている ICT を活用した広報と情報発信については、琵琶湖の概要紹介や研究成果の公表などを行っていきけるページを立ち上げた。また、SNS の積極的活用によって博物館の様々な活動紹介を週1回以上行った。また、英語による発信もすすめ、世界へ広く発信できることを目指した。これらにより、SNS の登録者数が順調に増えており、目標に向かって進められている。一方で、アンケートや学校訪問による対象者の感想や要望については、集計と分析を実施しているが、要望のすべてを受け入れられないとしても、それらを踏まえた事業の展開には至っておらず、それらをどのように博物館活動へ活かしていくかについての検討は大きな課題である。また、博物館の利用の仕方について、博物館利用で一番にイメージされる展示の利用などの来館による利用しやすさのみならず、来館が難しい遠方の方が利用することなども想定し、事業目標2などの他の事業目標とも関係しながら、「湖と人間」のこれからを考えるために必要な情報発信のあり方を考えていくことが重要である。

### ・ 各重点事業の目標と実施状況

#### 5-1. ICT を利用した琵琶湖の魅力とその入口としての博物館の紹介

琵琶湖の概要紹介ページを作成した。英語での紹介と同様の内容で、生物の写真や図などを使ってわかりやすいページを目指した。アクセス解析によれば、当館のネットページの利用は、来館の利用に必要な情報のページが中心で、他のコンテンツの利用割合は少ないが、数値的には数万件のアクセスがあることから、情報発信ツールとして、利用しやすさとわかりやすさの改善をしていくことが重要といえる。また、今年度は SNS を利用した情報発信を強化し、多くの情報発信により、登録者数が徐々に増えており、英語による発信も始めた。

#### 5-2. 双方向の広報や各種調査・評価による情報収集と事業への反映

アンケート調査の過去15年間の集計を実施した。その分析と評価は今後の課題。また、博物館利用についての調査方法はアンケートや、これまでの学校等訪問でいただいた意見の集計などの資料による検討を考えているが、具体的な方法についての検討はできていない。

#### 5-3. 来館しやすい環境の整備

駐車場から博物館までの経路の不案内については、数年前の対策を行ったものの、わかりにくいとの意見があることから来館者の動向を注視し検討する。また、来館しやすい環境の追求について、議論や検討すべき内容についての洗い出しができていない。

## ○事業6の目標 博物館の活動を安定して継続する

- ・ **実施目標**：老朽化した施設の改修や、災害に強い体制の確立を進めるとともに、活動基盤の安定のために、さまざまな支援を受ける仕組みづくりを進めます。
- ・ **評価指標**：安心感がある場所で安定的に継続した活動ができる

### ・ 内部評価

当館の基幹部分については長期保全計画に基づいて計画的に更新しているが、基幹部分ではない施設・機械設備等の改修については、施設の老朽化箇所の確認や今後の修繕計画のための調査を実施したので、令和6年度に施設設備修繕計画の策定を目指す。また、懸案事項であった展示室のトイレの修繕のほか、資料搬入のためのトラックヤードシャッターの修繕予算確保などを進めてきた。施設、特にバックヤードは老朽化が激しいため、安定的に安全な施設運営のために、今後も適切な対応を行っていく必要がある。災害時の対応については、関係部署との調整によるマニュアルの更新が必要であり、訓練についても計画的に実施していく必要がある。支援をうける仕組みについては、破損事故があった水槽を含む水族展示室の再生に向けたクラウドファンディングや支援寄付などの新たな制度を立ち上げ、多くの方からの支援を受けることができた。その一方で、支援を受ける制度の乱立にならないよう、今後の博物館活動との関係をみながら、整理・整備していく必要がある。

### ・ 各重点事業の目標と実施状況

#### 6-1. 老朽化した施設の改修と災害への備え

ハード面では、水族展示室入口付近のトイレ修繕の実施と、今後の施設設備修繕のための調査を実施した。また、令和6年度に向けて、トラックヤードシャッターの修繕や、エスカレーター・エレベーターの更新設計等の予算を確保した。

ソフト面では、危機管理体制の整備に着手するも、マニュアルの更新や関係部署の調整・情報共有の不備があったため、今後の調整が必要である。

#### 6-2. 安定した活動基盤を確保する仕組みづくり

これまでの支援制度とは別に、トンネル水槽などの水族展示再生のために、クラウドファンディングおよび新たな支援寄付制度を整備し、実施した。

令和6年度は、ピワコオオナマズ水槽等の再生のために、クラウドファンディングの第二弾の実施や支援寄付を推進していく。